

# るの は な

千葉大学医学部同窓会報 第96号 題字 鈴木五郎

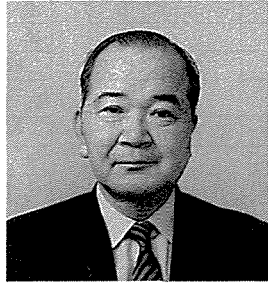
編集兼発行者  
千葉大学医学部  
るの は な 同 窓 会 報 編 集 部  
〒280 千葉市支鼻1-8-1  
千葉大学医学部内  
るの は な 同 窓 会  
電話千葉 (0472) 22-7171内線2038

## 附属病院長就任の挨拶

皮膚科学講座教授

岡 本 昭 二 (昭27年卒)

四月一日付で、医学部附属病院に就任いたしました。高見沢前院長のあとを引き継いで、第五十代目の病院長として、心を込めて二年間の任期を勤めるつもりでありますので、るの は な 同窓会の皆様方の御指導御鞭撻をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。



医学部附属病院は、一九七八年新築後すでに十一年を経過しました。この附属病院では、明治以来の諸先輩が築いてくれた素晴らしい伝統のもとに、日進月歩の医学にもとづいて優れた医療が行なわれております。このような医療を通じて臨床医学に関する研究と卒前卒後の教育が行なわれております。

医学部附属病院では、新築後より医療の情報処理にコンピュータを導入してきましたが、これらを拡充して新たな医療情報システムの推進を計画しております。高見沢前院長のもとに、二年前に稲垣教授を委員長とする「医療情

報システム推進委員会」が設置されました。この推進委員会には、症例データベース検討部会、資料管理検討部会、処方オーダー検討部会、検査データ処理検討部会、電子カルテ検討部会、診療スケジュール検討部会、医事会計処理検討部会、病院管理業務検討部会、研究教育サポート検討部会、看護業務検討部会という十の検討部会が設けられております。それぞれ部会の討議の結果について、毎月開催される推進委員会で討議されて、その成果がまとめられつつあります。医療情報システムのセンター施設としてのD棟建設の推進とともに、現在検討中の医療情報システムの早期導入が附属病院のスタッフ全員から望まれております。昨年病院教授に昇任された里村医療情報部長が、この医療情報システム導入計画の立案の中心として活躍してくれております。すでに、卒後臨床研修制度の改善については、厚生省の審議会や日本医師会の懇談会より報告が行なわれております。国立大学病院長会議常設委員会に設置された地域医療問題小委員会においても、大学病院のセミオープン化の検討が進んで、平成元年度よりいよいよ「研修登録医」制度の発足が予定されております。本附属病院においても、平成元年度に卒後生涯医学臨床研修部が設置されて、教授一

名、事務官一名の人員が措置されることが決定されております。さらに、平成元年度には放射線部に教授一名助教教授振替が予定されております。放射線部をめぐる最新の進歩は目覚ましく、CT、MRIなどの画像診断やR-Iシミュレーションなど多彩になっています。このように、大学病院の中央診療部門の充実がつきつきに行なわれております。これらに加えて、本医学部附属

## 平成元年度 るの は な 同窓会総会開催

平成元年度るの は な 同窓会総会が6月24日(土)、日本工業倶楽部(東京丸の内)で開催された。総会は貫洞一夫副会長の司会で、名尾良憲会長の挨拶により開始された。岡本昭二千葉大医学部附属病院長により千葉大学および医学部の近況報告があり、次に、昨年度物故会員37名の冥福を祈り黙禱を捧げた。引き続き、名尾良憲会長の議長に選出して議事に移った。金子敏郎常任理事より昭和63年度決算報告、平成元年度予算案(第二面)の提出と説明があり、原案通り承認された。

恒例の記念講演は、小林新造、前国立民俗歴史博物館教授による「江戸文化について」が行なわれ

病院における医療を取り巻く社会的環境は、年々と厳しさを増しております。したがって、本附属病院のかかえる諸問題にたいして、病院の全てのスタッフの協力と患者さんたちの理解をいただいで、解決への糸口をつかんでいきたいと、考えております。るの は な 同窓会の皆様はじめ、各方面の方々の御理解と御協力を頂いて、二十一世紀をめざして、よりよい医療ができる大学病院にしていきたいと考えております。



懇親会風景  
← 右端 名尾会長

## 村山医学部長 全国医学部長 病院長会議 会長に就任

五月二〇日、千代田区平河町の日本都市センターにて開催された本年度の全国(国公私)医学部長・病院長会議総会において村山智医学部長が会長(任期一年)に選出された。岡本昭二院長が常任理事に就任。なお、前年度は高見沢裕吉教授が副会長を務めていた。

## 速報欄

教授発令  
新美仁男(元・九・一)  
米満博(元・九・一)

富山るの は な 会  
(八月二十六日開催)  
富山医科薬科大学の片山喬医学部長(昭30卒)、小西善磨先生(昭18年・専・卒)ら十余名が富山市の「えび正」で欲談。村山医学部長が参加した。

三輪清三名譽教授は、胃癌で本医学部附属病院にて治療中であつたが、去る九月十八日午前十一時過ぎ、八十六才の生涯を閉じられ、二十一日告別式が行われた。慎んで哀悼の意を捧げる次第である。なお、追悼記その他は次号。

永眠される  
三輪清三名譽教授は、胃癌で本医学部附属病院にて治療中であつたが、去る九月十八日午前十一時過ぎ、八十六才の生涯を閉じられ、二十一日告別式が行われた。慎んで哀悼の意を捧げる次第である。なお、追悼記その他は次号。

# 会 計 報 告

## 昭和63年度 決算報告

## 平成元年度 予算案

### A. 収入の部

科 目	予 算 額	年度末決算額	差 引 高 (△減)
財 産 収 入	800,000円	876,845円	76,845円
会 費 収 入	6,200,000	6,745,500	545,500
事 業 収 入	8,500,000	9,804,000	1,304,000
寄 附 金	100	100,000	99,900
繰 入 金	0	0	0
繰 越 金	4,684,409	4,684,409	0
収 入 計	20,184,509	22,210,754	2,026,245

### B. 支出の部

科 目	予 算 額	年度末決算額	差 引 高 (△減)
1. 事業費			
会報発行費	700,000円	299,010円	△ 400,990円
名簿発行費	7,750,000	7,150,000	△ 600,000
新会員歓迎費	300,000	300,000	0
顕彰奨学金	200,000	200,000	0
慶弔費	100,000	44,440	△ 55,560
支部連絡費	300,000	110,000	△ 190,000
小 計	9,350,000	8,103,450	△ 1,246,550

### 2. 事務費

備 品 費	300,000円	65,000円	△ 235,000円
消 耗 品 費	700,000	278,702	△ 421,298
通 信 印 刷 費	2,500,000	2,130,125	△ 369,875
振 替 手 数 料	250,000	208,860	△ 41,140
会 議 費	100,000	70,345	△ 29,655
諸 手 当 費	1,900,000	1,966,269	66,269
退 職 引 当 金	71,000	71,000	0
謝 金 費	200,000	102,950	△ 97,050
小 計	6,021,000	4,893,251	△ 1,127,749

### 3. 予備費

基 金 繰 入 額	3,000,000円	3,000,000円	0円
予 備 費	1,813,509	703,030	△ 1,110,479
小 計	4,813,509	3,703,030	△ 1,110,479

支 出 計	20,184,509	16,699,731	△ 3,484,778
繰 越 額		5,511,023	

基 金 30,000,000+3,000,000=33,000,000円  
 退職金積立金 60,000+71,000=131,000円

### A. 収入の部

科 目	予 算 額	前年度比(△減)	備 考
財 産 収 入	850,000円	50,000円	
会 費 収 入	6,200,000	0	2000円×3100名
事 業 収 入	0	△ 8,500,000	
寄 附 金	100	0	
繰 入 金	0	0	
繰 越 金	5,511,023	826,614	
収 入 計	12,561,123	△ 7,623,386	

### B. 支出の部

科 目	予 算 額	前年度比(△減)	備 考
1. 事業費			
会報発行費	700,000円	0円	
名簿発行費	800,000	△ 6,950,000	
新会員歓迎費	300,000	0	
顕彰奨学費	200,000	0	
慶弔費	100,000	0	
支部連絡費	300,000	0	
小 計	2,400,000	△ 6,950,000	

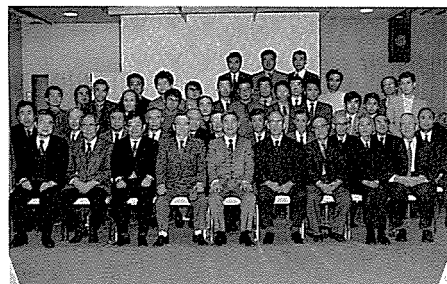
### 2. 事務費

備 品 費	300,000円	0円	
消 耗 品	400,000	△ 300,000	
通 信 印 刷 費	2,200,000	△ 300,000	
振 替 手 数 料	150,000	△ 100,000	
会 議 費	100,000	0	
諸 手 当 費	2,500,000	600,000	
退 職 引 当 金	105,000	34,000	
謝 金 費	400,000	200,000	
小 計	6,155,000	134,000	

### 3. 予備費

基 金 繰 入 金	3,000,000円	0円	
予 備 費	1,006,123	△ 807,386	
小 計	4,006,123	△ 807,386	

支 出 計	12,561,123	△ 7,623,386	
基 金	33,000,000+3,000,000=36,000,000円		
退職引当金	105,000円		



結するが、そうすると、千葉よりも川崎に出るほうが近くなり、当地区の診療圏も大きく変わることになる。また木更津、君津にまたがって上総学園都市の構想が企画

本年度のものはな同窓会総会は、去る昭和六十三年十一月二十四日、本部より来賓として、小児外科の高橋英世教授と新しく整形外科教授に就任された守屋秀繁先生をお招きし、宇都宮グランドホテルで開催された。

総会に先立ち、本年三月十三日他界なされた霜田俊丸先生(昭22年卒)の冥福を祈り黙禱のあと、総会協賛に移る。

特に本年度は、今迄にない五十余名の多数会員の参会をみ、栃木のはな会も益々充実、自治、独立協の二医大および厚生連、県立ガンセンター等の本学関連病院の諸先生方との交流も年毎に盛んにな

されておき、道路網の整備とともに大きな変化が予想される地域である。それと同時に首都圏に見劣らない医療体制の整備も重要な課題である。医療は心の繋がりが最も重視されるものである。今、わが国は、いろいろな点で、世界が羨むほどに豊かで、安定している国であるが、物質面では満ち足りていても、人間の内部的な心の問題になると、寧ろその反対で、貧しさが目立つようである。高齢化社会に突入して、この問題は一層深刻になるはずである。医療が細分化され専門化するると同時に、視野を広げて、もっと全体を顧る姿勢が医療に必要と思われる。

(神田芳郎(昭34)記)

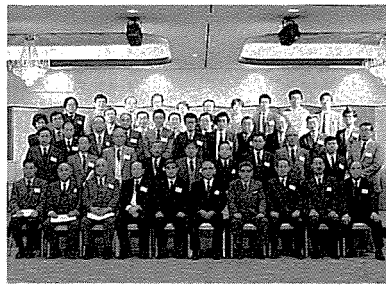
**各地のはな会だより**

**木更津のはな会**

平成元年2月23日(水)、当地区のはな会は、整形外科の守屋教授をお迎えして、市内のホテルで開催した。鈴木達也会長の挨拶、久米幹事の司会で、「スポーツ医学」というポピュラーな演題で、他科の先生達にも解りやすいお話をしていた。記念写真を撮影後、懇親会では、大先輩の三輪先生のお話、市川先生の乾杯など和やかに進化した。当地区は80名の会員があり、44名という予想を超える参加者があった。木更津は数年後の加入があった。横断橋によって首都圏に直結するが、そうすると、千葉よりも川崎に出るほうが近くなり、当地区の診療圏も大きく変わることになる。また木更津、君津にまたがって上総学園都市の構想が企画

り、同窓の親睦を深め、その実をあげている。

総会からは、恒例により、高橋教授からは、学内の近況をお伺いし、守屋教授より「整形外科領域における最近の話題」について興味ある学術講演を拝聴した。



引続いて懇親の立食パーティーに移り、牛山一郎県医師会会長(昭和25卒)の音頭による乾杯に始まり、話題はつきず、楽しい賑やかな酒宴が深更まで続き、のほな同窓会をますますの発展と会員各位の健勝を祈念し、盛會裡に終った。

(柴崎 晃(昭和28年)記)

### 中京のほな会

中京のほな会は、東海三県(愛知、岐阜、三重)の千葉大学医学部出身者の同窓会で45名の会員からなります。うち現役の医学部教授は、名古屋市立大学整形外科、松井宣夫(昭38卒)、岐阜大学放射線科、土井偉登(昭33卒)、同眼科、北澤克明(昭36卒)の三氏であります。

昭和63年度同窓会は去る6月11

日(土)、午後6時より、前回同様、納屋橋の「鳥久」で行われました。会員から要望の高かった「現役教授のお話」を三教授にお願ひ致し、快諾を得ました。当日、北澤教授は、突然の急用で御出席を願えませんでした。松井教授の「関節鏡視下手術を中心に整形外科における最近の話題」、土井教授の「消化器診断を中心に放射線科における最近の話題」を御講演いただきました。ともすれば難解になりました。お話しが素人にもわかりやすくお話しいただき、一同学生時代にもどった様な、楽しく豊かなひとときを過ごすことができ、誠に有意義でありました。なお土井教授は、昭和64年4月27日、28日に、第28回日本消化器集団検診学会を開催されますので、同窓会の皆様方にも、是非御参加いただき、旧交を温めたい旨のお話しがありました。一同拍手をして、御盛會を念じました。

ひきつづき、伊藤源一(昭5)杯の音頭で懇親会が始まり、会員一同思い思いに旧交を温めつつ、夜が更ける頃、またの再会を約して散会した。

出席会員は、伊藤源一(昭5)、近藤素生(昭6)、内田孝(昭11)、奥村郁郎(昭11)、住田満也(昭12)、吉村善郎(昭15)、大磯英夫(昭21)、鈴木多之助(昭24)、石田克久(昭24)、米本昭彦(昭29)、土井偉登(昭33)、松井宣夫(昭38)、市川清子(昭41)、岩間汪美(昭43)、三浦利重(昭46)、山口英明(昭50)。(吉村善郎(昭15)、岩間汪美(昭43)記)

### 横須賀のほな会

今年(平成元年)は例年より一ヶ月早く、四月十五日(土)、横須賀のほな会を開く。医局を通じての集りは別として、学制改革を境にして各地同窓会の集りが悪くなったと耳にしている。御多分にみれず当地でもその傾向がなきにしもあらず残念である。

戦前、戦中は「のほな会」に追いつけ、そして追いこせ、と他の大学の先生方が自分達の大学の同窓会をもちあげたとも聞いている。新学制後、第一回卒業の先生方は既に還歴をすぎ、その外中堅の先生方も卒業後数十年がたつている。世の移りに従つて戦前、戦中派と何とはなしに遠ざかつてゆく、近い将来こうした先生方でも「のほな会」の隆盛時代を再現していただきたいと願っている。

戦前から当地の「のほな会」は合同で開いている。昭和3年卒の森本先生、昭12卒の久富先生、昭13卒の鴻先生(浦賀病院勤務)、薬学、昭5卒、中島先生、



御老体の諸先生方が皆さんお元気で参会。六十才も後半になろうとしていた私達もこの会では若手になってしまふ。

昨年米寿を迎えられた森本先生、来年は卒寿を記念して再び普通の個人展をひらかれる由、亦戦後四十数年、硫黄島を訪れ、米軍からあつい歓待をうけたお話、益々御元氣な御様子、会員一同先生について在野で努力しなければならぬ事を痛感する。

学校保健で活躍されている宮入先生(昭23卒)、薬学の鈴木先生昭26卒)、市の衛生部長をしりぞかれて後も大学で、保健を講議されている木本先生(昭23卒)、未だに私達の脳裡に残っている。東京湾、横須賀沖でおきた「なだしお」事件で、自衛隊地区病院の病院長としていろいろ奔走された川口先生(昭32卒)、防衛大学衛生課医務室で活躍されている天野先生(昭27卒)、診療のあいまに絵を楽しんで元氣な姿で参会されている今村先生(昭16卒)。

本年は日程が一ヶ月早かったため、学会その他いろいろの事情で参加者が少く、昨年にくらべて些かさびしかったが、本日欠席の先生方で大長老の国分先生(昭14卒)もお元氣で、青木先生(昭28卒)、佐藤先生(昭25卒)の両先生は横須賀市医師会の中堅として活躍されており、森先生(昭37卒)横須賀共済病院の耳鼻咽喉科部長として笠井先生(昭52卒)と健斗しておられる。

戦前、横須賀共済病院、市立病

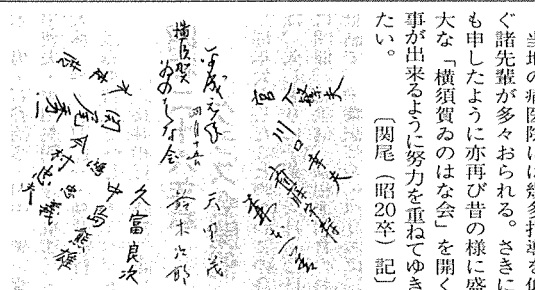
院、続いて聖ヨセフ病院、戦中から戦後にかけて着実な地歩を築いて来た「のほな会」が段々居城を失いさびしくなっている。そうした中で、最後の居城として、浦賀病院がのこっている。病院長の尾先生(昭23卒)、はじめ瀬戸尾先生(昭28卒)、石橋先生(昭45卒)、宮崎先生(昭50卒)、それに大先輩の鴻先生が勤めておられる。当地の病院には幾多指導を仰ぐ諸先輩が多々おられる。さきにも申したように亦再び昔の様に盛大な「横須賀のほな会」を開く事が出来るように努力を重ねてゆきたい。

(関尾(昭20卒)記)

### 市原のほな会

市原市は千葉市の南に位置し、市内にゴルフ場が二十数ヶ所もあり、養老渓谷までも含まれる広大な面積で、関東では横浜市とはほぼ同じ広さを有するといわれている。JR内房線の八幡宿、五井、姉ヶ崎の三駅にまたがるこの市は、これから大いに発展すると期待されている。

市内には千葉労災病院、県立鶴



舞病院、帝京大学市原病院があり、これら三病院には多くののほな会員が勤務している。今回はこれら三病院ののほな会員名簿を完成し、市内の開業医のかたを含め、市内全員ののほな会員に通知し、6月19日、姉崎に最近できた懐石料理店の「淡粋」で開催された。出席者は31名で、会はず麻羅徹三会長(昭21卒)の挨拶、川越不二男前会長(昭14卒)の乾盃で始まった。会の進行に伴い、内田威郎市原市医師会会長(昭32卒)

中村常太郎県立鶴舞病院院長(昭32卒)、加藤繁夫千葉労災病院副院長(昭31卒)の挨拶がはじまる頃から、現在の日本の医療、市原市の医療についての議論が白熱し、活発なやりとりがあり、なかなか愉快で、にぎやかで、有意義な会であった。

(川名正直(昭34卒)記)

# クラス会だより

## 昭八会クラス会

本年の昭八会(昭和12年卒)は幹事 横山達雄兄の地元、八王子で去る平成元年5月21日(日)に開催した。



午前(セント)八王子病院に集合し、院内の絵画や彫刻を鑑賞し、次いで、T.Y八角堂美術館では一階のピカソハウスでウイオリン演奏に耳を傾け、二階の横山院長秘蔵の美術品に眼を惹き、一同行大いなる感動を受けて、マイクロバスで奥高尾の「うかい鳥山」へ向かった。小雨模様だった天候はこの頃から晴れて、五月の新緑が美しい「うかい鳥山」で正午にクラス会を開会、本年度幹事、横山達雄兄の挨拶のあと、物故会員41名に黙禱を捧げ、爐を

囲んで家族的な懐石料理を賞味しながら、卒後五十二年の懐旧談に時の経つのを忘れて楽しい会であった。

明年度(平成三年)幹事は、巖彰兄が引き受けられ、東京都内で開催する予定です。

出席者(16名名簿順、敬称略)：大塚潔武、川北良平、佐藤 譲、菅井規矩雄、菅井晴子、鈴木 敏、田中幸夫、日向秀夫、日向美枝子、久富良次、久富 翠、村上 実、村上ウタ、横山達雄、横山和歌子、巖 彰。(久富良次 記)

## 名尾良憲ののはな同窓会長就任祝賀九耀会開催

昭和九年入学の九耀会は名尾良憲君が、同窓会々長に就任されたことはクラスの名誉であるので、小林龍男名誉教授の御臨席を頂きお祝いのクラス会が、昭和六十三年十一月十二日、防衛庁のグラウンドビル市ヶ谷で催された。

名尾君から会長就任の抱負を述べられ、その中には「のはな同窓会総会には出席者が少く、殊に若い会員の参加が少ないので何とか多数出席されるように努力したい」と話された。

次いで小林先生から、名尾先生が、のとはな同窓会々長に就任されたことは大変御苦労を頂くことになりましたが、まことに最適任です。同窓会の発展の為に寄与して頂くことを期待していますと

話された。

続いて古い医専時代のことを話され、千葉で大きな火事があったとき、三輪徳寛校長が書かれて消防団長の犬野はかり店々主に贈られた雄渾鮮やかな筆致の感謝状が披露された。

また会場のある新宿区の古絵図を閲覧されたが、在京の級友も多かったので大変興味深く拝見した。

出席者：名尾良憲、北村 武、伊藤清夫、神谷博達、木村康正、熊谷利雄、土屋隆義、土岐政令、真野謙一、水野春江、宗像市之助、守屋 弘、鴻 忠義。(昭13) 記

## のとはな四葉会報告(昭20専卒)

卒業後終戦直後を除いて毎年必ず開催されたのとはな四葉会は、



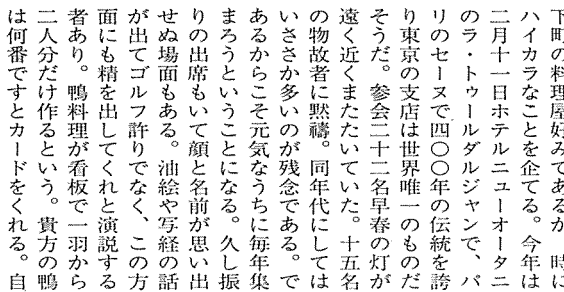
今年も安中正哉先生(長崎大学、高知女子大、自知医科大学名誉教授)御夫妻をお招きして大戸戸橋、淡路島、丸亀を中心に四国の旅を楽しんだ。安中先生は若い者が顔負けする程お元気で長寿の御講話を頂いた。

出席者は家族を含め29名。日程、昭和63年10月8日より10月10日まで3日間。

全行程プランナー及びリーダーは高岡郡中土佐町開業の西本眞士夫君御夫妻でこのお二人のホスピタリティは全級友の等しく認めるどころ。感謝し、再会を約して高松にて解散。

## 二十四年卒クラス会報

万年幹事の長沢仁一君は大体は下町の料理屋好みであるが、時にハイカラなことを企てる。今年は二月十一日ホテルニューオータニのラ・トゥールダージュンで、パリのセーヌで四〇〇年の伝統を誇り東京の支店は世界唯一のものだそう。参会二十二名早春の灯が遠く近くまたいた。十五名の物故者に黙禱。同年代にしてはいささか多いのが残念である。であるからこそ元氣なうちに毎年集まろうということになる。久し振りの出席もいと顔と名前が思い出せぬ場面もある。油絵や写経の話が出てゴルフ許りでなく、この方面にも精を出してくれと演説する者あり。鴨料理が看板で一羽から二人分だけ作るという。貴方の鴨は何番ですとカードをくれる。自



分の〇九〇七七二だった。昔話とはどがなく忽ち三時間近くが過ぎて散会、元氣な連中は二次会に出かけて行った。長沢君が丈夫なうちはこのクラス会は必ず毎年続くこと間違いないからクラスの諸君は出来る限り出席して頂きたい。当夜の参会者は藤本知明・奥真一・信国英一・大西盛光・中島令一・樋口 豊・国府田幸夫・小池和祐・小島恒教・月岡幸雄・小林準三・小林 弘・高野興三・高木一男・石谷治彦・田中 光・賀川興夫・吉田義朗・寺島東洋三・大林 泰・長沢仁一・長井和行。浅春や若桃をへしシャーベット

毎年欠かしたことはないこの会は、久し振りに千葉で六月一日に開催。岩垂信、森和夫両君のお世話で、千葉駅ビル・ペリエに二十三名が集まり和やかに一夕を過ごした。なお来年の幹事は関根、西宮両君。(村山智(昭26) 記)

## 昭和二十六年卒クラス会開催

昭和二十六年卒のクラス会開催

## 春秋会

昭和六三年十一月十九、二十の両日、昭和四十四年から島田市に開業の辻 輝蔵君の企画で、寸又峡の秋の溪谷美を満喫した。新幹線と車で容易に深い溪谷が探訪できることに驚かされた。

富士の眺望の素晴らしい日本平ホテルに宿泊して宴会。早く着いたグループは、一年前に静岡で老人病院を開設した中野喜久男君が

登呂遺跡、三保の松原をガイドしたが、その博識は相当なものらしい。ラシイとしたのは私は遅参したため参加できず勿体ないことをした。



日本平ホテルの二次会だけで取まらず、夫人を置き去りにして三次会に繰り出した。この三次会にも私は体調を考えて不参加で、記録係として失格だが、何のお手伝いもしないので、諸兄に頼めない次第。

宴会で中野君は自己の闘病体験の話や、宴会中に公務多忙で脳貧血を起した友あり、またリハビリ中の友の報告あり。我々昭和一行は働き過ぎだ。私事で恐縮だが、私は医師会やロータリーの旅行など一切参加しない。自分の病院の旅行も昨年から参加しない。弱い自分の体調を守るためだ。春秋会の旅行だけに参加するのは、当然なことだが同



級生だけは、これから作る事ができないからだ。  
古川君は佐賀の唐津から、博多に出て羽田に飛び逆行して静岡に來た。同じ思いだろう。  
愛妻組は小野清四郎常任幹事、辻輝藏、古川裕生、大島一浩、志村公男、中野喜久男、上野恭一、関白組は滝沢明祐、関光倫の諸君。  
(上野恭一(昭和31年卒)記)

### さんろく会

(昭和三十六年卒)

六年制医学部になって最初のクラスである私共は、久しぶり、お茶の水の山の上ホテルで、六月十九日(日)にさんろく会を開催した。これは最近、珍しくも慶応大学教授に同級生の川村光毅君が就任した事を祝おうと云う声が高くなつたので急転幹事が設営したもので、我がさんろく会にとっては、久しぶりの慶事であった。

働き盛りの年頃だけに集まったのは二十六名。各自、近況を報告する等、楽しさいっぱいの会であった。ハブニングもあった。会が終ろうとする時、和歌山医大教授玉置哲也氏(昭38)が同じホテルで学会の打ち合わせをしていて参入し、懐かしい組み合わせの話合いもあった。  
当日、次回は甲府で開催、幹事は、山角博君と山梨医大教授塚原英雄君。卒業三十周年の三年後は黒田健昭君、吉野明昭君を中心とした第一内科出身者が幹事をやる事が決まった。  
さんろく会会員の最近の昇任者



は、川鉄病院長に関幸雄君。国立精神保健研精神保健計画部長に吉川武彦君(元琉球大教授、埼玉県立寄居)とも病院々長に松本生君(埼玉医大助教授)等がいる。今回の出席者は次の通り。  
川村光毅 黒田健昭・小野沢君夫・秋元富夫 新井一夫・三宅伊豫子・国安芳夫 副島訓子・長谷川幸子・岡田信道・栗原正明・諏訪部博・中田義隆・戸井道夫・成瀬幸月・野本一夫・藤塚立夫・村上秀瑛・吉野明昭・吉井逸郎・鈴木伸典・網代洪・淵上隆・前島清・福井進  
(幹事・諏訪部博、青木謙記)

### 昭43年度卒業クラス会

昭和63年6月19日、昭和43年度卒業生のクラス会が千葉ロイヤルプラザホテルで開催された。昭和43年度卒業生といえは、一人一人が大学紛争との関わりあいをもちて人生を歩んでいる学年ということになるが、それもあって今迄何



回かひられたクラス会にお世話になった恩師の諸先生方をお招きする機会を失っていたのである。しかし卒業後20年の節目を迎えて、着実に活躍をしていることをみて頂きたいの思いが高まり、この会を催すことになったのであった。それはまさに盛大なクラス会であった。働き盛りにある卒業生90名のうち実に71名が参集した。沖縄からも、New Yorkからも参加した。当時の先生方も実に21名ご参加頂き、出席番号順に別れた各テーブルで、我々の話を聞いていただいた。また、当時のことを思い出しながら、昔と変わらない声でスピーチもいただいた。お体をご不自由であるのに遠方から奥様ご同伴で来られた福山先生のお話には、初めての専門科目である解剖学を教わった頃と変りない医学教育、人間教育に対する情熱を感じた。また「君達は当時のことをどのように総括しているのか」と問い質された井出先生には、当時の出来事が我々だけでなく先生方にとつても、過去の記憶としてだけでなく、現在も何かの形で顔を出しお考えいただいていた。折に触れお誘いされた。この大同志会の終了にあたり、諸先生方を当時の我々に「愛」と「寛容」を示してくださいましたこと、そしてともに悩んでいたことにあらためて幹事から感謝が述べられた。そしてこの集まりをきっかけにして記念誌を作成すること、亥鼻キャンパス内に記念植樹を行なおうという計画が発表された。  
(追記・昭和63年11月11日に、医学部本館から図書館亥鼻分館へ向かうところを中心に、しだれ桜2本、そめい吉野桜7本の植栽を行いました。)  
(文責 栗山喬之)

### 53会に出席して

千葉大学小児外科 岩川 眞由美

初夏の雨の降る昭和六十三年五月二十八日、五三卒の同級会が千葉駅ビルのペリエホテルで開かれました。主催してくれたのは、生まれつきのヴォランティア(世話好きのお人好し)の整形外科の新しい井君と呼吸器内科の山口君、神経内科の得丸君です。卒業十年とあって、一応殆んどの方は、就職あるいは開業したりと、少し、昔を懐しむ余裕のできる時でなかなかの盛況でした。男の人は相変わらず

かつこよく、女の人は相変わらず美しくといたいところですが、お腹のでる人、頭の風通しのよくなった人、白髪のでた人、しわの増えた人、人のふりみて我が齢を感じる人といったところでした。  
又、貧富の差も大きく拡がり、私のような大学の日やとい(さすがにこの身分のものは、小児外科と二外だけでしたが)から、地域の名士でベンツののっている人まで、又、地位の面でも、下は私のような大学の日やといから、上は、遠藤君のような国立大学助教授まで様々で、社会の縮図がペリエホテルに再現されました。一人一人の近況報告に大笑いしてあつた間に時間がすぎます。料理もさほど苦にならず、二次会はカラオケとなりました。  
やっぱり同じ青春を生きた人はなつかしくうれしく、次の会をたのしみにする今日この頃です。  
\* \* \*



### 第14回のはな美術展開催

平成元年7月11日から17日まで、銀座集雅堂ギャラリーで開催した。出品者は昭和3年卒の森本一善以下20名で、出品作品は書・陶器・洋画31点であった。7月16日、会員の紹介による春陽会々員森田賢画伯の批評を受け、そのあと銀座アスターに16名が参集して懇親会を行った。来年度も同会場で開催予定。  
昭和63年度の行事として、左記の会員の作品8点が母校の教室に寄贈された。

- 今井知文(昭4卒)・10F
  - 甲斐駒ヶ岳・耳鼻科へ、斉藤英一(昭16卒)・8F
  - 花藤(昭16卒)・50F
  - 外房漁港・第2内科へ、今井力(昭22卒)・6F
  - 上高地風景・第2内科へ、石谷治彦(昭24卒)・10F
  - 東京晴天・第3内科へ、山口庚児(昭31卒)・8F
  - 第1内科へ、齊藤篤(昭34卒)・4F
  - 花・整形外科へ、島田哲男(昭41卒)・10P
  - 病院坂下。(石谷治彦記)
- ◎  
のはな美術展事務所  
〒169 東京都新宿区高田馬場 1-25-29  
石谷医院 石谷治彦(昭24卒)  
☎03(200)0078

# 退任記念式典が開かれる

本年三月で定年により千葉大学医学部の教壇を去られた中島博徳先生(小児科学)、降矢 震先生(検査部)、および萩原彌四郎先生(高次機能制御研・発達生理分野)に対する記念式典と記念講演会などが挙行された。

## 中島博徳教授

(昭23卒)



十二年間にわたって小児科学教室を主宰された中島博徳教授は、本年三月停年退官され、千葉大学名誉教授となられました。

これに先立って、「小児科学教室十年の歩み」と題する最終講義が、2月10日(金)、午後3時30分より医学部附属病院第一講堂において、学生ほか学内外の多数の方々の出席のもとに行われた。その内容は、昭和52年金沢大学から千葉大学にもつづれ、小児科学は Comprehensive pediatrics、すなわち小児科学の各分野をすべて包括した小児科学が基本であるとのお考えのもとに、各分野のサブスペシャリストの育成をめざされた教室づくりの成果をまとめられたもの

であった。最後に、病気を cure する医師ではなく、病気を manage する人を goal できる医師になって欲しいという言葉を学生に残して教壇を去られた。

今年度は、中島先生と高次機能制御研究センター発達生理分野の萩原彌四郎先生、附属病院検査部の降矢 震先生の三教授が一緒に退官されたので、医学部主催の退官記念式典は三教授合同で3月18日(土)、2時より附属病院第一講堂で行われた。

記念式典では、村山 智医学部長のご挨拶のあと、吉田 亮学長、小林龍男名誉教授、名尾良憲同窓会長、森小児科同門代表、加濃発達生理分野同門代表、中検査部同門代表からそれぞれ祝辞があり、小児科教室 新美、発達生理分野 長谷川、検査部 米満が、それぞれ三先生へ謝辞を述べた。

つづいて放送大学教授 笠原一男先生による「乱世の人間像」と題するユニークな記念講演が行われた。記念式典につづき附属病院第三講堂で記念祝賀会が行われ、多数の方々のお席のもとに先輩、同僚から祝辞が述べられて、和気あいあいのうちに滞りなく記念式典および祝賀会を終了した。

## 萩原彌四郎教授

(昭23卒)



終りに、最終講義、退官記念式典、祝賀会に際して、色々お世話になった世話人会をはじめとする皆様からお礼申し上げます。千葉大学医学部小児科学講座 教授 新美仁男(昭33卒)

本年三月末日をもって、高次機能制御研究センター発達生理分野教授、萩原彌四郎先生は三十九年間在職された千葉大学を停年により退官されました。萩原先生は脳機能研究施設教授および施設長、医学部長をつとめられるなど学内外で広く活躍されましたが、あのはな同窓会では鈴木五郎、大塚文郎、小林金市、三代の会長のもと二十四年の間、会計委員、常任理事(会計担当、庶務担当)として同窓会の会計基盤の確立ならびに内外会員の交流のために尽力されました。千葉医学会では編集幹事および委員、会長、会計幹事(現在)、また猪之鼻奨学会では理事、会長(現在)をつとめられています。退官に先立ち、二月十七日(金)

午後三時半より医学部第一講義室において、「直徑〇・一ミリの導線」と題して最終講義が行われました。萩原先生がライフワークとされた脳、心臓をはじめとする各種器官組織の微小循環の薬理を主題に、ユーモアを交えながらすすめられた講義は先生の人柄を髣髴とさせ、出席した学生をはじめとする多数の方々に深い感銘を与えました。

次いで、三月十八日(土)、午後二時から、退官される萩原彌四郎教授ご夫妻、中島博徳教授ご夫妻、降矢 震教授ご夫妻をお迎えし医学部主催の退官記念式典が附属病院第一講堂で行われました。式典は稲垣教授の司会ですすめられ、村山医学部長の挨拶につづき、吉田学長、小林名誉教授代表、名尾同窓会会長、同門代表の祝辞が寄せられ、各教室の助教により先生方への謝辞が述べられました。記念品贈呈、花束贈呈のあと退官される主賓の先生方が挨拶されました。萩原先生は自分が大学卒業以来、四十年、研究、教育および大学運営において大過なく過ごしたのは学内外と国内外の恩師、同僚、共同研究者、研究補助者、事務の方々をはじめとする多くの人達のあたかい支援のお陰であると、礼を述べられました。記念講演につづいて、第三講堂に会場を移して祝賀パーティーが行われました。会場から溢れる程の盛会でした。このような立派な退官記念式典が取り行なわれた事は、世話人会をはじめとする関係者の方々のおかげと、教室員一同心から

## 降矢 震教授

(昭22卒)



お礼申し上げます。千葉大学医学部附属高次機能制御研究センター萩原彌四郎教授との医学部主催、合同記念式典が附属病院第一講堂に於いて厳かに行われました。式典は村山医学部長の挨拶にはじまり、吉田学長、小林名誉教授代表、名尾同窓会会長の祝辞が、また検査部からは同門代表から、部代表米満の謝辞が述べられました。

退官されることになった小児科

昭和四十二年以来二十二年間検査部を主宰された降矢 震教授には、三月末をもって停年退官されました。

これに先立ち二月十四日、附属病院第一講堂において、「医学化学十年の回顧」と題する最終講義が二十二年の学生をはじめ多数の方々の出席のもとに行われました。講義は医学化学教室当時の酵素化学研究の回顧にはじまり、検査部に於ける新しい酵素反応測定法の開発にまで及びました。さらに研究や人生に対する心構を独特のユーモラスな語り口で話され、名句を混えた多くの示唆に富むものであったため、聴く人に深い感銘を与えました。次いで三月十八日には、ご一緒に

学の中島博徳教授、高次機能制御研究センター萩原彌四郎教授との医学部主催、合同記念式典が附属病院第一講堂に於いて厳かに行われました。式典は村山医学部長の挨拶にはじまり、吉田学長、小林名誉教授代表、名尾同窓会会長の祝辞が、また検査部からは同門代表から、部代表米満の謝辞が述べられました。

ついで放送大学教授 笠原一男教授の「乱世の人間像」と題する記念講演が行われました。

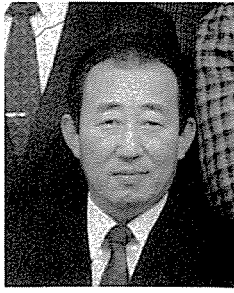
このように退官記念行事を立派に滞りなく行うことが出来ましたのは、医学部長を実行委員長とする世話人会の先生方をはじめ、関係各位の御厚情の賜物で、部員一同心よりお礼を申し上げます。なお降矢先生には、千葉大学名誉教授の称号が贈られ、今後は立場をかえて大所高所から後進の指導をしていただけるものと期待しております。千葉大学医学部附属病院検査部 教授 米満 博(群馬大昭35卒)

# 新任教授紹介

この度、本学医学部附属病院医療情報部、岡山大学医学部解剖学第三講座および千葉大学医学部衛生学講座の教授にそれぞれ就任された、里村洋一先生、徳永 勲先生および能川浩二先生に研究や教室運営の抱負を述べていただいた。

## 教授就任にあたって

千葉大学医学部附属病院医療情報部教授  
里 村 洋 一 (昭41卒)



昭和六十三年十二月十六日付で、附属病院医療情報部の教授に就任しました。文字通り昭和の時代の最後の教授就任です。大学を卒業して後約十年間にわたって、肺癌研究施設に在籍し、肺の外科を仕事としておりましたが、昭和五十年に、病院にコンピュータが導入され、それに伴って学内措置として医療情報部が設置されたので専任教官として配置換えになりました。以来十三年、一貫して、病院情報システムの整備、病歴管理、診療データのデータベース化を担当して参りました。五十六年には文部省の予算措置があり正式の部門として再出発し、さらに六十三年、教授職の設置が認められて今日に至りました。

医療情報部は、他の中央診療部門とやや性格を異にし、コンピュータを使う事によって病院運営の効率化や診療、研究の支援を行う事を目的としています。

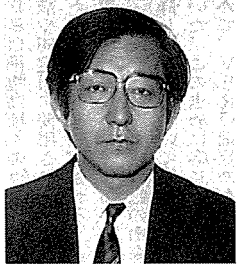
近年、情報処理技術は飛躍的に進歩し、われわれの社会のすみずみまでコンピュータの応用が行きわたるようになってまいりました。医療の世界も、やや遅ればせながら、この社会状況に対応して変化しはじめています。特に、この数年来、医療経済の逼迫が云々されるようになり、病院経営の合理化や医療の客観的評価が問われるようになってまいりましたので、医療における情報化は急速に展開してゆくと思われれます。大学病院は、医学・医療の先端を社会に還元する役割を担っていますが、こうした医療の社会的観点からの向上も先がけて実現しなければなりません。医療情報部は、単にコンピュータの応用を企画するだけではなく、病院管理システムの改革、組織的医療の環境整備、さらに、日常の医療行為を支援し、より高

レベルの医療を効率よく供給できる態勢づくりを心がけてまいります。病院長をはじめとする病院管理陣は、情報化を当大学病院の重要なプロジェクトと認識し、昨年、病院のあらゆる部門からの代表者を組織して、病院情報システム推進委員会を設置しました。一〇の部会を持つこの委員会は、本年はじめて第一回の報告書をまとめ、次期システムの構想を明らかにしました。これは、院内の全ての部門にコンピュータ端末を設置し、これを光通信ケーブルで結び、これをネットワークを通じて伝達する計画で、その結果として、患者データその他の病院内で発生する情報の総合的データベースを構築するとするものです。カルテも電子化し、処方箋や検査オーダーなどはもとより、病歴記載もワープロの機能を生かして医師自身が入力することを予定しています。進んでは、人工知能の技術を活用した診断支援システムや、画像データを電子化したいわゆる PWS と いわれる画像データベースも導入してゆく予定です。この総合的なシステムの完成は、病院における仕事の手順を一変すると思われ

ます。これらの研究は、前述の総合的な病院情報システムの中で

# 教授就任のご挨拶

岡山大学医学部解剖学第三講座教授  
徳 永 勲 (昭42卒)



昨年十二月一日付で岡山大学医学部解剖学第三講座に川村光毅教授(昭36卒、慶応義塾大学)の後任として着任致しました。教授会の諸先生はじめ、先輩諸兄姉に多大の御力添えを頂きましたことをこの紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

第三解剖学教室は昭和四十年に新見嘉兵衛教授(岡山大学名誉教授、現岡山県立短大学長)の着任をもって開設された、医学部のなかでは新しい教室ですが、その歴史をたどれば、上坂熊勝教授の時(明治三十四年、昭和七年)にまで遡ることが出来ます。小川鼎三先生は「脳の解剖学を勉強するには、……岡山に上坂先生につくか、仙台について布現之助先生につくか、そのいずれかだつた(神経進歩、一九七七)」と回顧しておられます。上坂、新見そして川村先生と代々大変立派な神経解剖学者が本教室を主宰され、特に上坂、新見両先生は学

力を發揮するはずであると考えています。

院賞に輝いておられます。こうした赫々たる業績と伝統のある教室を引き継ぐことになり、責任の重さを痛感しておりますが、腰を落ち着けてじっくりと脳研究に取り組める環境に大変満足しております。

中枢神経系攻略の武器ともいえる実験手技の進歩には目を見張るものがあります。近年の遺伝子組

## 動き

### 石橋文相来学 専門研修医募集

★石橋一弥文部大臣来学  
九月一日、石橋文部大臣(東金市出身)および文部省幹部職員らが附属病院を訪れ、岡本病院長が案内で近代設備を中心に見学された。吉田学長、村山医学部長も同席した。

★卒後・生涯医学臨床研修部と専門研修医について  
新設の「卒後・生涯医学臨床研修部」の教授選考が進められている。この臨床研修部の対象となる専門研修医(文部省原案では登録研修医)は、医師(歯科医師)免許取得後二年以上の開業医や病院勤務医で、十月二日より募集を開始、十一月より発足する。カリキュラムは二十九診療科、

み換え技術の発達により、神経組織中の特定の遺伝子の動的発現状態を解析できる様になっております。こうした神経生物学領域の最新の技術を貪欲に取り入れる一方、解剖以外の専門領域の研究者と交流も活発に行いたいと思っております。また脳内神経回路の解明も重要な課題のひとつです。種々の標識法はじめ免疫組織化学法を駆使して所見を積上げていくつもりであります。今後とも何とぞ宜しく御指導御鞭撻の程お願い申し上げます。

来春の入学試験  
六十八コースが用意されており、研修は週一回程度、月額四一〇〇円の研修料を納入する。既に募集要項を配布している。詳細は次に問い合わせるとよい。〒二八〇千葉市中央区一八一 千葉大学医学部附属病院「卒後、生涯医学臨床研修部事務局」 ☎〇四七二(二二)七一一 内線三〇三六

★平成二年度入学試験について  
本医学部入学試験はいわゆる分離分割方式となる。①大学入試センター試験は一月十三、十四日②前期試験二月二十五日(八十五名)③後期試験三月十一日(十五名)計一〇〇名④前期と後期の両方は受験できない。

# 「長尾家の人々」

橋 正道 (東大・昭29卒)

医学部本館前の木立の中に長尾精一先生と荻生録造先生のレリーフが業績の碑文とともに置かれている。言うまでもなく長尾先生は本学医学部の前身である公立千葉病院の院長、千葉医学学校、第一高等中学校校長であり、その後を継がれたのが荻生先生である。

このレリーフはそれまで西門の近くに置かれていたが本館近くに移され、改めて昭和63年5月17日に除幕式が行われた。その式に長尾先生の御親族である長尾義三氏御夫妻および長尾龍郎氏が出席された。私(橋)はかつて京大に在籍したさい、ともどもに伏見の公務員宿舎に居住した縁から義三氏の知遇を得ていたので、この除幕式にお声をかけたのである。このさい、義三氏より昭和60年に四国新聞に載った「長尾家の人々」という欄のコピーを賜った。現香川県が御一家の出身地である。長尾義三氏(京大工学部教授昭和62年退官、現日大教授)は精一の長兄、益吉の曾孫に当たり、長尾龍郎氏(富山県高志リハビリ病院副院長、本学部昭和40年卒)は精一自身の曾孫である。

2年間西洋内科、外科学を学び、高松赤十字病院(高松赤十字病院の前身)を設立し、また種痘館を建設するなど高松医学界のレベラップに大きく貢献した人である。精一はこの益吉の世話で医学を学んだ。明治5年(1872)、大学東校改め第一大学医学学校(東大医学部の前身)に入学し、卒業後直ちに公立千葉病院院長兼千葉医学学校教頭となった。以降、学校の昇格があるごとにその長を務め、本学部の創設、発展に多大の力を尽くし、終わりは千葉医学専門学校長として明治35年(1902)に千葉旭町の自宅で亡くなられた。勉強家で、お若い頃は頑固で激しい気性を持ち、鉄血宰相ビスマルクの異名があったという。荻生校長はその後を継いだが春風胎動とした対蹠的なお人柄であったといわれる。お二人の組合わせの妙と、勃興期と安定期に相応しい人物を得たことが本学部の発展に大きな力となったのであろう。

御一家に一人の奇傑があった。それは精一の長兄、益吉の長男折三(義三氏の祖父)である。幼少より文筆の才あり、漢詩をよくし医師の道を好まなかったが、親代わりを務めた精一の努力があり、一時この叔父と絶交までしながらようやくこの亥鼻の第一高等中学校医学部に学び第2年目の卒業生(明治23年)として医師になった。漢城と号し、香川県の県医となり、新聞に携わった。随筆、漢詩など健康を振るった。その後、医師の欲望や名譽欲、功名心による弊害や医

政・制度の批判を述べた「噫(あゝ)医弊」を匿名で発刊し、これは当時(明治41年)のベストセラーになったという。また医学界の巨頭とか気鋭の学者といわれる人々、またその頃の医政一般を弄活しユモアで評した「当世医者氣質」は同じく大好評を博した著作である。このようなことが、その四国新聞にまとめてあり、また折三の著書「噫医弊」と「当世医者氣質」の翻刻版が亥鼻図書館に寄贈されて一般の閲覧に供されている。今日にもほほは当てはまる内容があり、痛快な読物である。またこの中に長尾家の系譜も詳しく述べられている。

近藤克則(昭58卒)共著 『当直医マニユアル』 医歯薬出版(三〇〇頁、定価二〇〇〇円、昭和63年5月発行)

本書は、当直医の行なう医療に関するコンパクトな指導書であり、ブライマリ・ケアを日夜実践している若手医師達により編集された。救命救急処置法、症状別対処法など当直医が遭遇し実践すべき要点をポケット版にまとめてある。頻度の高い疾患を網羅しており、専門医と連絡すべき基準も示してある。薬剤は市販名を主に記載し副作用の記述も怠りない。事情に応じた本書を補うためのメモスペースを設けている。当直医に限らず、研修医一般に必要な事項を盛り込んだバイブルと言えよう。従来の書が抽象的論議にとどまりがちなブライマリケアの技術的基準について、第一線医療の現場から提案

したひとつの試みの書でもある。(N.S.)

清水 文七(昭33卒) 編著 『VERO CELLS』 千葉大学医学部微生物学第一講座出版、二三四頁、昭和63年8月発行

VERO細胞は試験管内培養細胞であり、昭和37年本学細菌学(現・微生物学第一)教室に於て安村美博獨協医科大学教授(昭26卒)により樹立された。細胞が由来する組織はミドリザルの腎臓である。そこで、細胞名は、氏がエスベラントの堪能者であることから、ミドリを表わすVERDAと腎臓を意味するRENOから合成されたことである。

この細胞を世界の研究者に最初に紹介したのは清水教授であり、昭和39年アメリカ留学の際持参し南米の出血熱の原因ウイルスを同定するのに使用した。それ以来、VERO細胞は種々のウイルスの増殖や同定用に使用され、さらにワクチン製造にも利用されるなど世界各地で重用されている。そこで、多くの研究者が本細胞の由来と詳しい性状について知りたがっていた。この求めに応じ、本書は改めて、VERO細胞の有用性を明確にした。細胞樹立を報告した最初の日本語文献を英訳して紹介し、微生物学教室に保存されていた早期継代細胞の生物性状を記載し、一方、細胞を使用した代表的論文を採録した。

ない。無菌操作等の実験機器がそれほど進歩していなかった26年前、並大抵のことではなかった。たとえ細胞が樹立できても有要な株として認められることは至難の事である。そのような様々な障害を乗り越えた価値ある生物資源としてVERO細胞が科学史に銘記されるべく、本書は編集されたと言えよう。一細胞株に関する出版物が刊行されたことは異例だが、研究室の研究成果をこのような形でまとめることも有用だと本書は教えている。(N.S.)

人事移動

教授昇任  
里村洋一(昭41卒) 医療情報部  
齊藤 隆(昭50東工大卒) 遺伝子情報  
能川浩二(昭40金沢大卒) 衛生学

助教昇任  
龍岡穂積(昭54卒) 解剖学第三  
秋草文四郎(昭50卒) 病理学第二  
講師昇任  
武藤壽孝(昭51新大衛卒) 歯科  
山口哲生(昭53卒) 呼吸器内科  
内藤藤哉(昭42卒) 耳鼻咽喉科  
井坂茂夫(昭51卒) 泌尿器科  
佐藤武幸(昭49卒) 小児科  
菅野正幸(昭49卒) 臨床検査部  
本田正重(昭51千大理卒) 医療情報部  
諸岡信裕(昭48金沢大卒) 内科  
武田憲夫(昭51卒) 眼科  
後藤藤雄(昭48卒) 整形外科  
南 昌平(昭48卒) 整形外科

氏名	卒年	没年月日
高橋熊三郎	(大9)	昭61・8・13
新島 和	(大10)	昭63・11・18
山口 文助	(大10)	平1・5・28
丸山幸太郎	(大12)	平1・1・9
内田 敬八	(大13)	昭63・10・28
中路 三平	(大14)	昭63・9・15
三橋佐久司	(大14)	昭63・8・30
渡辺 進	(昭5)	平1・1・8
福田 正捷	(昭7)	平1・3・30
大気 寿郎	(昭10)	昭63・3・8
露崎 衡平	(昭11)	昭63・11・12
大地 薫	(昭11)	昭64・1・3
会沢 太冲	(昭13)	平1・2・24
野沢 保光	(昭14)	平1・3・30
吉村 善郎	(昭15)	平1・4・8
石田 庄	(昭16・3)	平1・1・23
紅谷 篤男	(昭16・3)	平1・2・9
三宅 一郎	(昭16・12)	昭64・1・1
伊藤 隆康	(昭17)	昭63・9・12
坂本 高明	(昭17)	昭63・10・20
林 一郎	(昭19)	昭63・9・24
梅本 由己	(昭21)	昭63・10・30
早田 稔	(昭21)	平1・5・13
木村 嘉孝	(昭24)	昭63・9・10
酒井 幹雄	(昭24)	昭63・12・28
杉本 義雄	(昭24)	昭63・11・1
山田 正三	(昭26)	平1・4・20
村上 利恵	(昭29)	昭63・11・20

編集後記

前編集委員徳永 徹先生が岡山大学へ御転任したことより、本号は鈴木信夫(昭47卒)と村山 智(昭26卒)により編集いたしました。なお、同窓会事務員は、7月1日より、今泉伊代子さんから黒木君江さんへ交代しました。